

国連NGO横浜国際人権センター・うずしおランチ T-over人権教育研究所・人権こども塾 ニュース



Q. 中学生当時、「全体学習（みんなで語り合う人権学習）」をどう感じていたか？

部落問題学習を盛んにしてた頃からはや20年、月日がたつのは早いものですね。
小学生の頃は自分が地区の出身だということなど知らずに育ち、中学生になったときにその事実を知らされたときは、何がなんだかわからなかったのを覚えています。

アキラは地区外に転居していた地区出身の生徒でした。地区出身の子どもたちは、子ども会活動の中で自分の立場を理解していったのですが、彼にはそういう機会がありませんでした。
そんな子は他にもいましたが、自分の立場をどう捉えるか、気になる存在の一人でした。

クラスでの話し合いや全体学習を通して、徐々にその中身というか実情を理解していき、自分には何が
できるのか、どうあれば良いのかを考えるようになりました。

はじめは綺麗事しか言えなかった自分も、幾度も話し合いを重ねていくうちに、「そうじゃない、本当
の自分でぶつからないとみんなと分かり合えるはずがない」と察し、怖さや恥ずかしさを乗り越えて恐る
恐る語ったものです。どんな話題にせよ、人それぞれの思いや意見があり、それに賛同したり反論したり、
ぶつかり合いながらも理解し合えた時、仲間との絆が強くなっていったようにも思います。

同級生の仲間の真剣な悩みや苦しみ、その語りに仲間意識を感じ、ネガティブに捉えるの
ではなく、前向きに捉えることができたと言います。

部落との初めての出会いが、アキラにとってはマイナスにはならなかったのです。

Q. 十数年経った今、全体学習（みんなで語り合う人権学習）をどう思っているか？

部落問題だけではなく、普段の生活でもそれは同じで、社会に出てからもその時の活動は活かされて
いるように思います。人との繋がりややり取り、なかなか上手くいかないことの方が多いですが、部落問
題学習を取り組んでいたお陰で、自分を素直に出せて分かり合おうと努力できているように思います。
中学生の頃に真剣に部落問題に取り組んでなければ、自分に自信が持てず、綺麗事しか言えない大人
になっていたかもしれません。

以前ここで紹介させていただいた別の回答者と同じことを、アキラも述べてくれました。
申し合わせたわけでもないのに、不思議なものです。

現在は部落問題に関わることはなくなりましたが、いつまでも差別という
ものはなくなるのでしょうか？人が生きてる限りは、人と差をつけなければなら
ないのでしょうか？

その問題ははまだ自分のなかでは解決できずにいます。永遠の課題として抱えて
生きていくことになるだろうけど、重くは考えず、あのときの活動で培った経験を活か
し、自分らしくをモットーにのびのびと生活していこうと思います！

何に出会うか、どう出会うか。 出会いの大切さを痛感します。

出会いが悪ければ、マイナスイメージを払拭するのに相当なエネルギーを必要とします。
でも出会いが佳ければ、その後の人生の捉えが全く前向きなものに変わってしまいます。
そんな「佳き出会い」を、多くの子どもたちと分かち合いたいと思います。

みんなで語り合う人権学習は、——「すべてを変える」